The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	言語文化共同研究プロジェクト「認知・機能言語学研究X」の目的と活動
Author(s)	小薬, 哲哉
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2025, 2024, p. 1-3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102192
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

言語文化共同研究プロジェクト「認知・機能言語学研究 X」の目的と活動

小薬　哲哉

本報告書は、大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻の 2024 年度言語文化共同研究プロジェクト「認知・機能言語学研究 X」の成果をまとめたものである。本プロジェクトでは、認知言語学及び機能主義言語学という理論的枠組みに基づいて研究をしている教員・院生を中心に、個別言語の現象分析から様々な言語事象の理論的意義について考察、交流することを目的としている。理論と実践とが乖離することなく互いにフィードバックし合う研究を目指しており、また、同じ方向性を共有した研究を行っている本専攻にゆかりのある研究者にも参加いただき、各氏が専門とする研究アプローチ・理論的枠組みから意見交換を行うことで、最新の研究動向の把握とともに、研究活動のさらなる活発化を図っている。

本プロジェクトは､2015 年に当時の言語文化研究科専任教員であった早瀬尚子先生、田村幸誠先生、筆者の 3 名により「認知・機能言語学研究 I」としてスタートしたプロジェクトを引き継いだものである。すなわち、開始からちょうど 10 年目を迎えたのである。開始当初は、研究における興味関心の共有を目的とした研究会を不定期で行っていたが、その後、当時の大学院博士後期課程の院生によって発足した「大阪認知言語学研究会」と本プロジェクトの研究会が合流し、それから大学院生の研究分担者の加入やリサーチ・アシスタント（RA）の配置、2019 年からの新型コロナウイルス感染症の流行に伴う全面オンライン化などを経て、現在のオンラインによる定例研究会と年 1 回の対面研究会という形式に落ち着いた。

オンライン研究会は、コロナ禍で加速したデジタル化の影響を受けて開始されたが、最初は Zoom でのリアルタイムオンライン会議のみだったものが、最終的に発表動画の事前配信、Google スプレッドシートへの質問・コメントの集約、Zoom でのリアルタイム意見交換会という現在の形式に発展していった。ここ数年（特に人文学研究科統合以降)、海外からの留学生が多く在籍していることもあり、日本語にまだ不慣れな方にとっては、動画配信であれば発表を見直すことができて、助かっているというご意見もいただいている。スプレッドシートでの事前質問の記入も、コロナ禍での学会のオンライン大会を参考にしたものであるが、これには参加者からの質問に対して返答

を事前に考えることができるという利点がある。質問の事前記入を導入して以降、会当日のディスカッションが濃密なものになったと感じている。また、当日参加できない方からも意見やコメントをいただくことができるという点も長所であり、学会発表や修士論文、博士論文の準備として発表いただく方にとって、貴重なご意見やアドバイスを参加者から漏れなく記録し、今後の参考にできるようなシステムとなっている。

一方で、年数回程度の対面開催についても、その後に懇親会を開催して親交を深めている。かつては院生だった方々も、今では国内外で大学教員として活躍されている方も少なくない。そのような状況を見ると、10 年という月日の長さ、そして短さを感じて大変感慨深い。

10 年の間に多くの貴重な出会いがあった。現在では様々な分野の方々にご参加いただいている。プロジェクト「認知・機能言語学研究」をこのように続けてこられたのも、プロジェクトメンバーとして参加してくださった方々、学内外から研究会に足を運んでくださっている方々のおかげである。皆様に、深く感謝申し上げる。また、博士論文執筆の忙しい時期に、本プロジェクト 2024 年度 RA として支えてくださった王鈺氏にも心より御礼申し上げる。